（様式２）

議員行政視察報告書

議　員　名	高木　ひろたか
視　察　地	熊本県　熊本市
視察年月日	令和６年１月１６日（火）

視察内容　サクラマチクマモトと花畑広場によるにぎわいの創出について

説 明 者　熊本市都市建設局都市政策部市街地整備課　課長補佐　寺尾　圭

案　　内　熊本市議会 議会局 議事課 議事係　主事　原田　雅史

●視察の概要

2016 年４月に連続して震度７の揺れが襲った熊本地震。その復興プロジェクトの一環として「昼も夜も歩いて楽しめる、いつまでも魅力的なまち」をコンセプトに、熊本駅周辺、通町筋・桜町周辺など中心市街地を４つのエリアに分けて再開発を行い、今回の視察ではその内の「桜町・花畑地区のまちづくり」について視察した。

桜町・花畑地区は駅から少し離れているが、熊本城に隣接し市役所や百貨店、一日発着約 6,000 台のバスターミナルなど中心市街地の核と言える地区であるが、施設の老朽化やバスターミナルのバリアフリー、狭い通路など多くの課題があり、民間会社において「桜町再開発構想」が発表され、「熊本桜町再開発準備株式会社」が設立、平成 23 年には行政機関も交えた「桜町・花畑周辺地区まちづくりマネジメント構想検討委員会」が発足した。

具体的な整備としては、「車中心から人中心の考え方」に転換し、熊本城と庭つづき「まちの大広間」として天守が望める市道を廃道にし、人が歩き集えるシンボルプロムナードへ変換。また、民間事業者と協定を結び、災害時には一時帰宅困難者など 11,000 人が３日間滞在可能な備蓄に加え、マンホールトイレや手押しポンプ、地下には雨水貯留槽などの防災機能は熊本地震の際に大きな役割を果たした。

バスターミナルを中心とした商業施設には、ホテルや住宅、約 2,300 席のメインホールに大小 19 室の会議室など含む熊本城ホールがあり、さらに屋上庭園や建物自体のデザインは圧巻である。また、人工芝を敷き詰めた広い空間では様々なイベントが展開され供用開始４年半の実績としては、休日稼働率 71.9%、集客約 320 万人、351 件の実績であり、市民が集える広場として大きな効果を生み出している。

次の段階として、花畑広場横の市道について廃道にし、商店街から続く新たな空間として実証実験を取り組んでいるが、周辺の民間事業者の理解を求めるのに苦慮してい

る。しかしながら、優れたデザインの街並みや災害時における活用などは民間事業者との営利や開発時期などが一致し、それによって再開発が進んだ良い事例で言える。

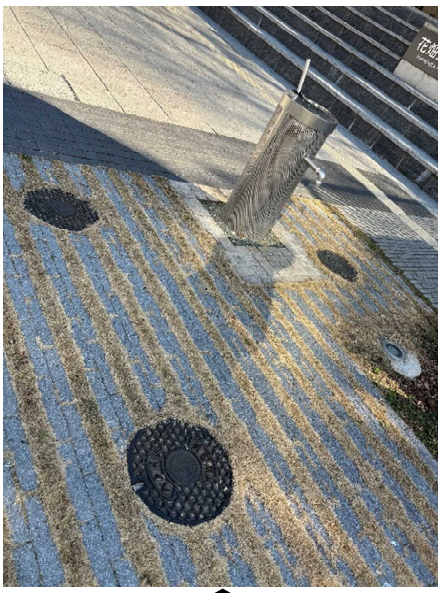
●旭川市における活用について

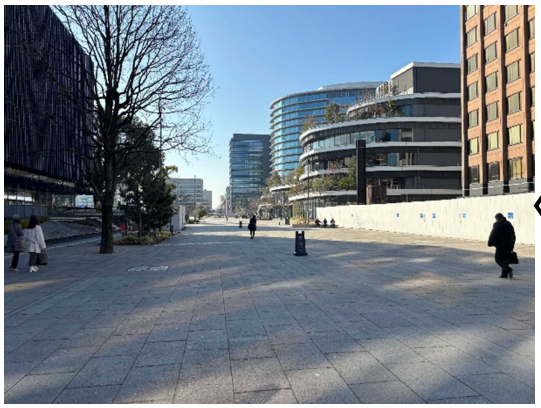
本市においても中心市街地の活性化はこの間の課題であり、大きな成果がないまま推移していると言える。今回の視察で一つは市道であったため廃道にできたことが大きいと言える。全国に先駆けて行った旭川における歩行者専用道路「買物公園」はいまだに道路として認定されているため、開発にも何かと制限がかかる。

また熊本は地震等の災害が多いこともあり、そういった経験が危機管理につながり、災害に強いまちづくりの観点からも住民理解も得やすいことが再開発につながったと言える。

本市においては、中心市街地全体の開発絵図がないまま、商業施設やホテルなどが建設され、全体を見据えた再開発ということではない現状にあると言える。熊本に限らず全国の幾つかの先進地の共通する点は、中心市街地の活性化には民間事業者からの発信で民間事業者主導の下、行政としても関わりを持ちながら中長期を見据え一体となって進めている点である。本市の現状では再開発による活性化よりも何らかの事業により活性化を実現することの方が現実的と言える。

●商業施設前の花畑広場
様々なイベントや災害時の避難場所として活用できる





●シンボルプロムナード
市道を廃道にし、歩行者専用の空間に変更。

●手押しポンプと
マンホールトイレ
災害時の際、避難所として活用するための設備。施設内には備蓄倉庫を完備。

（様式２）

議員行政視察報告書

議　員　名	高木　ひろたか
視　察　地	島根県　出雲市
視察年月日	令和６年１月１７日（水）

視察内容　「まちあそび人生ゲーム」について

説 明 者　出雲市商工振興部商工振興課　　課長　天野　朋彦

〃　　出雲市総務部情報政策課デジタル戦略室　室長　田中　寛

（ＮＰＯ法人 出雲まちあそび研究所 理事長兼務）

挨　　拶　出雲市議会 副議長　保科　孝充

●視察の概要

出雲市から始まった商店街活性化に向けた取り組み「まちあそび人生ゲーム」が、今では北海道岩見沢市をはじめ、14 都県の 36 の街の様々な商店街などで行われている。その内容について、全国のけん引的役割を果たしている出雲市「ＮＰＯ法人出雲まちあそび研究所（＝研究所）」の理事長が出雲市の職員であることから、出雲市役所において説明を受けた。

この発想が生まれたきっかけとしては、「商店街を元気にしたい」思いから取り組まれているイベントは、広場にステージを設置しそこで様々な催しを実施。そこに人が集まるが、商店主達は裏方として忙しく、イベントのために呼んだ外部の出店者だけが儲かるという状況にあり、また一過性に終わっている現状にあった。「なんとか自分たちのお店にお客さんを呼ぶことができないか」との思いから生まれたのが、商店街全体を舞台にした「まちあそび人生ゲーム」である。

ゲームの仕組みとしては、参加商店を募り人生ゲーム風の商店街のマップを作成、開催日に集まった参加者が抽選で職業を決定。決まった職業に応じて給与（専用通貨）をいただき、ルーレットを回し停まった商店に訪問し、店員とやり取りしながらマップに書かれているイベントを体験。ルーレットで次のお店に行く。それを繰り返し、ゴールをめざす。訪れた商店でのイベントで専用通貨を増やしていき、ゴールした段階で一番所持金が多い方から順位が決まる仕組みとなっている。

このゲームによる効果として、ゲーム参加者は地域の子ども連れが多く、ゲームを通して街を歩き普段入ったことがないお店を訪れ、コミュニケーションを図ることにより、近くて遠い存在だった商店街から身近なお店となり新たな発見、購買につながる機

会が生まれている。また店主も、自店を振り返り「強み」や「特徴」を再認識し、営業方法を見直すきっかけにもなっている。さらにこのイベントを繰り返すことで、それぞれの商店が自ら割引券や試食・試供品の配布、お店で独自のゲームを行うなど店主も楽しむように変わり、またイベント時に参加店から買物（複数店）をするとボーナスがもらえる購買意識を高めるなど、商店街全体が明るく元気になってきているとのこと。

そういった効果によりこのイベントが全国的に広がっている。研究会としては開催に向けたセミナーの開催をはじめ、イベント実施までのお手伝いからゲームに必要なグッズの貸し出しなど、全国での取り組みの支援を行っている。「まちあそび人生ゲーム」は、参加者が楽しめることはもちろんのこと、その地域の特性をゲームに入れることができることから、全国で商店街の活性化に悩む地域の救世主的取り組みと感じた。

●旭川市における活用について

旭川市でも中心市街地の活性化が大きな課題の一つであるが、買物公園を中心とする商店街でこの人生ゲームを実施するとなると大イベントとなり簡単ではないため、手始めに銀座商店街くらいの規模で実施することが望ましい。いずれにしても、商店街の方が中心となるため、まずはこの取り組みを知ってもらうことが必要と言える。

熊本市の視察で報告したが、中長期を見据えた中心市街地全体の開発絵図を持たず、買物公園では商業施設やホテルなどが建設され、全体を見据えた再開発は難しい現状にあり、こういったイベントによって人が集まる活性化が本市では必要ではないかと思う視察であった。

（様式２）

議員行政視察報告書

議　員　名	高木　ひろたか
視　察　地	東京都　武蔵野市
視察年月日	令和６年１月１８日（木）

視察内容　武蔵野クリーンセンターについて

説 明 者　武蔵野市 環境部 ごみ総合対策課 クリーンセンター担当課長

田中丸　善史

●視察の概要

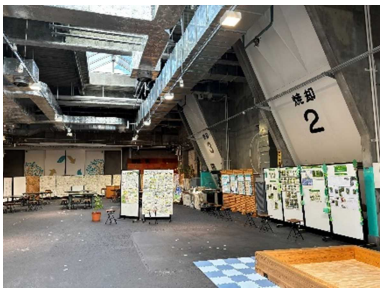
本市の近文清掃工場と同じプラントメーカーである荏原環境プラント（株）の武蔵野クリーンセンターと併設する「むさしのエコ re ゾート」を視察した。初代のクリーンセンターは 1973 年（昭和 48 年）「武蔵野市内のごみ処理のため処理工場を設ける」ため検討を開始。都心へのベッドタウンである武蔵野市では用地選定が一番の課題であり、選定に当たっては候補地予定の住民代表、一般市民、専門家などで構成される委員により様々な角度から白熱した議論が重ねられた。このことが「武蔵野方式」と呼ばれる市民参加の議論の礎となった。旧クリーンセンターは 1984 年（昭和 59 年）に稼働が開始され、その際に「武蔵野クリーンセンター運営協議会」が市民側委員 9 名、市側委員 2 名の構成で発足し、定期的に協議会を開催し運営状況や環境整備、福祉の増進、啓発活動など施設の安全・安心な稼働の監視役を担う体制をつくった。

主要設備の耐用年数により建替えに向けての検討に入り、この間の武蔵野方式、運営協議会の取り組みにより市民参加による検討委員会で協議され、新施設のコンセプトとして、①環境の保全に配慮した安全・安心な施設づくり～地球温暖化対策を意識して～②災害に強い施設づくり～東日本大震災を契機に～③景観及び建築デザインに配慮した施設づくり～迷惑施設からの脱却を目指し～④開かれた施設づくり～前項と同じ迷惑施設からの脱却～、の 4 点を基に設計。とくに②の災害に強い施設としては、エネルギー効率が高く災害時に強いガスコジェネレーション発電設備を完備し、災害時のエネルギー確保に対応している他、③の景観・デザインでは周辺環境との調和まちに溶け込むことを目的に、焼却設備はすべて建物内に納め高さも 2 階までに抑えるために、ごみピットなど地下を深くしている。また旧施設の煙突を再利用し建設コストを抑えるとともに、建築デザインとしては武蔵野の雑木林をイメージし、テラコッタルーバー（格子状に配列する素焼きの外装材）と壁面緑化でやわらかく包み込み街並みに溶け込む施設

となっている。さらにクリーンセンターから生まれるエネルギー利用として、隣接する市役所、むさしのエコ re ゾート、コミュニティセンター、総合体育館、温水プールに小中学校へ電気や蒸気を供給するとともに各施設でも太陽光発電や蓄電池を設置し夜間の余剰電力を充電、昼間に活用するなど、地域全体でエネルギーを融通している。とくに驚いたのは、隣接する市役所などの施設へは電力会社の送電線を利用するのではなく、独自に自営線を引き送電しているため、余分な費用がかかることなくクリーンセンターの電力を活用している。④の開かれた施設として、施設内には予約なしに自由に見学できる他、オープンスペースも設置。またエコマルシェやこどもワークショップなどのイベントを開催している。

※ＤＢＯ方式：建設費 111 億 2,468 万円・運営費 105 億 6,050 万円（20 年間）

さらに、隣接するむさしのエコ re ゾートは旧クリーンセンターの管理棟、プラットホーム、搬入扉をリノベーションした施設で、地球温暖化を背景に市民や市民団体、事業者、関係機関、行政など多くの主体が参加して、ごみをはじめ様々な環境について学び・行動・活動するための施設として、市民との議論を重ねて実現した。搬入扉が残るプラットホームを整備し作られたフリースペースは自由に出入りができるとともに、環境に関する講演やイベント、廃材を使ったものづくり工房に利用されている。また、部屋もいくつかあり、勉強会などの貸室としても利用されている。

●旭川市における活用

迷惑施設として思われがちなごみ処理工場を市民から親しまれる施設としてきた武蔵野クリーンセンターの取り組みは素晴らしい。何よりも地域住民とともに検討・協議を行ってきたことが一番の要因だと考える。住宅地のど真ん中で市役所の隣に立つ施設としての建築デザインや様々な工夫、市民に身近な施設としての利用促進など、近文清掃工場の建替え時には、同じプラントメーカーの最新設備の導入はもとより、地域の拠点施設としての役割も十分検討する必要があると考える。